

取組区分	再使用(リユース)
団体名	財団法人地球・人間環境フォーラム 理事長 炭谷 茂
住所	東京都文京区
取組の連携実施主体	
<p>NPO法人環境り・ふれんず、プロ・ワークス、NPO 法人エコネット上越、環境 NPO 良環、ベアーズファーム、ねっとわーく福島潟、リユース・くらぶ・にいがた、て to て倶楽部、豊栄福祉交流センター”クローバー”、PIG UP、仙台市葛岡リサイクルプラザ、NPO 法人スペースふう、A SEED JAPAN、NPO 法人社会資源再生協議会、日産スタジアム、tiny drops shizuoka、NPO 法人富士市のごみを考える会、名古屋学院大学”マイルポスト”プロジェクト、デポネット三重、環境対策支援便 RE-ECO、千里リサイクルプラザ研究所、リユース食器の ABC、NPO 法人タブララサ、立命館アジア太平洋大学環境サークル ones'1、那覇市リサイクルプラザ アースの会</p>	
取組名称 リユース食器ネットワーク ～楽しいイベントに、ごみはいらない。	
概要	
<p>・本取組は、NPO / NGO や自治体、大学の環境サークルなど拠点となる 26 団体の連携のもとに行われている。「楽しいイベントに、ごみはいらない」をテーマに各団体はそれぞれの地域でリユース食器やカップを貸し出す他、イベント会場での食器洗浄車によるデモンストレーション、エコイベントのコーディネートなど独自の活動を展開している。</p> <p>・リユース食器ネットワークのホームページを通じ、各団体の取り組み内容やリユース食器導入事例の紹介、イベント案内、環境負荷についての情報発信を行っている。</p> <p>・年に1回リユース食器フォーラムを開催し、団体間で情報交換を行うほか、リユース食器ネットワーク共通のカップを製作している。</p>	
受賞層 -	
先進性・独自性	
<p>・団体間での食器の融通 地域に適したリユース食器の普及・促進活動を独自に進めているが、大量の食器貸し出し依頼がある場合、ネットワーク内で連携し、各団体が保有する共通カップ等を集め、融通することで大口への対応を可能にしている。</p> <p>・地域から全国へ、全国から地域へ 地域内に限定されがちな個々の団体の活動情報をリユース食器ネットワークを通じて全国に紹介する一方、衛生・保管面などの課題への対応策、回収率の向上方法などの情報をリユース食器ネットワーク事務局から各団体に提供している。</p>	
有効性	
<p>リユースカップと使い捨て紙コップを比較した LCA 評価によると、エネルギー消費量は 6.3 回以上、CO₂ 排出量は 2.7 回以上、水消費量は 2.7 回以上、固形廃棄物は 4.7 回以上のリユースで紙コップの負荷を下回る。リユースカップは 50 回程度繰り返し使用できることから、リユースの回数が増えるほど、1 回あたりの各負荷量は減り、ごみの減量効果や地球温暖化防止、資源の節約につながる。</p>	
継続性	
<p>・2005 年 3 月に設立されたリユース食器ネットワークは 16 団体のネットワークでスタートし、2006 年に 4 団体増加し、20 団体になり、2007 年 9 月現在、26 団体になっている。</p> <p>・毎年「リユース食器フォーラム」を開催し、一般への PR とともに、本取組の進捗状況・課題の整理、団体間の連携を確認する場としている。</p>	
波及性	
<p>・リユース食器導入イベントの増加 ap bank fes '06 において、リユース食器ネットワーク共通カップ 4000 個が拠点 10 団体から集められ、4 万 5200 個の使い捨てカップの削減に成功した。2007 年 7 月の ap bank fes '07 ではカップだけでなく食器も全面的に導入され、3 万人が利用するなど、一度利用したイベントでは継続して利用されることが多く、イベント参加者が自身の主催するイベントでも利用するという波及効果もみられる。</p> <p>・自治体によるリユース食器導入補助制度 山梨県増穂町では、同町で実施されるイベントにおいてリユース食器を使用した際の費用の一部補助。横浜市青葉区でも「青葉リユース食器利用促進補助事業」を実施。</p>	
その他	
<p>洗浄費込みの有料での食器貸出団体は、地域密着型のコミュニティビジネスとしても成功を収めつつある。</p>	
推薦の有無 -	

取組区分	再生利用(リサイクル)
団体名	あだちエコネット事業パートナーズ 足立区長 近藤やよい
住所	東京都足立区
取組の連携実施主体	株式会社イトーヨーカ堂、サミット株式会社、株式会社西友、株式会社マルエツ、株式会社ライフコーポレーション、日東燃料工業株式会社、株式会社サンベルクス、株式会社コスナカムラ、帝人ファイバー株式会社、株式会社トムラ・システムズ・ジャパン・アジアパシフィック、住友商事株式会社、NTTコミュニケーションズ株式会社、ボランティア技能集団トイ・ドクターズ
取組名称	あだちエコネット事業 ステージ2 - 生活者・小売店・自治体が協働するペットボトル新回収・リサイクル事業 -
概要	<p>概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あだちエコネット事業とは、足立区を舞台に、生活者、事業者、自治体、地域団体、学校等がパートナーシップを組み、連携・協働して地域の環境活動に取組む事業。 ・第一弾として、ペットボトルの資源回収・リサイクルの新しい事業創造に着手。 ・スーパー店頭を回収拠点に選定、自動回収機(RVM)を使用して区民から資源回収。自動回収機への投入の際「キャップとラベルをはずして」「水洗いをして」等の分別回収ルールを店頭のサインや印刷物で区民にわかりやすく伝え、周知徹底を図る。 ・環境ICカード「あだちエコネットポイントカード」を導入。ペットボトルの資源回収で楽しくポイントをためられる仕組み。1本あたり5ポイント(0.5円相当)を提供、1000ポイントで100円分の買い物券等と交換。 ・回収したペットボトルは、自動回収機の機能を活かし、効率の高い回収作業、収集運搬を行い、最終的には国内でボトル to ボトルの再商品化を行うプラントで処理。
受賞暦	-
先進性・独自性	<ul style="list-style-type: none"> ・ペットボトルの店頭回収の新モデルを創造 ・ICカードを使用した環境ポイントカード・システムを開発。スーパーチェーン8社25店が地域共通の環境ポイントカードを導入したのは全国初。 ・回収ペットボトルは国内でボトル to ボトルの循環型リサイクル
有効性	<ul style="list-style-type: none"> ・18年7月から順次導入したペットボトル新回収システムの回収実績は、19年8月までの累計の本数で5533476本、重量で198t。この期間の足立区回収全ルート合計回収量を前年と比較すると約10%増となり、回収量全体の増加に寄与。 ・ポイントカード導入により、資源回収量は急増。18年11月末にカード導入した4店の12月回収量は前月に比べて平均66%増加。 ・地域生活者の積極的な店頭回収への参加により、回収効率の高いルート構築が可能に。 ・自治体のペットボトル回収に関わるコストの削減に貢献 ・自動回収機は資源回収を担当する小売店の業務改善、オペレーションコスト削減にも貢献。
継続性	<ul style="list-style-type: none"> ・参加パートナーの拡大(18年度:スーパー5チェーン16店舗参加、19年度:新たに14店舗が導入計画) ・単発のイベント・キャンペーンではなく継続事業として実施
波及性	<p>スーパーと自治体が協働する店頭回収の取組みは、地域生活者から高い支持を受けている。「買ったところに容器を還す」ライフスタイルは、「いつでも自分の生活時間に合わせて利用できる」利便性に支えられて、着実に地域生活者の暮らしに浸透を見せている。</p> <p>ペットボトルはごみではなく貴重な資源だという認識が浸透し、経済的で環境負荷の少ないリサイクルシステムに参加しようという意識が生活者の分別回収のマナー向上につながっている。</p> <p>自治体事業の流れをくむ資源回収・リサイクル事業に、民間の知恵やセンスを生かした細やかなサービスが取り入れられている。</p> <p>この事業を契機に小売店と自治体の対話が深まってきている。</p> <p>この事業の実施以降、複数の自治体や小売店からのヒアリングが入り、同様なシステムの導入が検討されている。</p>
その他	-
推薦の有無	-

部門：地域の連携・協働部門 **区分：奨励賞**

取組区分	発生抑制(リデュース)、再使用(リユース)、再生利用(リサイクル)
団体名	ごみ5R推進本舗 代表 落合真弓
住所	広島県福山市
取組の連携実施主体	福山祭委員会企画実行委員会 つれのうて友の会 株式会社オガワエコノス P&Pリサイクル 福山祭実行委員会及び福山市
取組名称	ばら祭「笑コ笑コもったいない」プロジェクト
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・2005年、福山祭委員会企画実行委員長より「ばら祭をクリーンで楽しい祭りになりたい」との申し出を受け、関係者と連絡、連携し、プロジェクトを実施。 ・出展業者の理解と協力、中学生を主体とする学生・一般・団体約700名のボランティア及び約150名の行政職員によるボランティアの活躍により実施。 ・株式会社オガワエコノス、P&Pリサイクル及びヨコタ京都工場などの協力の下、容器包装廃棄物のリサイクルを実施。
受賞暦	2006年国際ソロプチミスト日本財団環境貢献賞、RCCエコロジーファンド大賞
先進性・独自性	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生を主体とするボランティアの活躍とごみ5R推進本舗の会員企業の参画で本事業は達成された。中学生主体が来場者とともに分別や場内美化への協力を誘発し、環境保全意識の向上が図られた。 ・行政職員もボランティアで参加することで協働と環境保全の意義を学べる場となった。
有効性	<p>取組を始めた2005年 2007年の容器包装発生量の変化(取組前のごみ量は2トン車10台分)</p> <p>マテリアルリサイクル</p> <p>缶 850kg 380kg</p> <p>ペットボトル 291kg 210kg</p> <p>P&Pトレイ 156kg 494.5kg</p> <p>洗ったプラスチック 94.8kg 121.9kg</p> <p>段ボール 140kg 0kg</p> <p>サーマルリサイクル</p> <p>汚れたプラスチック類 1250kg 490kg</p> <p>汚れた紙類 1870kg 930kg</p> <p>リサイクル合計 2196 4019kg</p> <p>焼却処分 3120 0kg</p> <p>リサイクル率 41.3% 100%</p>
継続性	2005年から開始以後、毎年、企画実行委員会の部会としてプロジェクトをつくり実施。
波及性	<p>企画実行委員会の構成部会として「笑コ笑コもったいない部会」を2006年から創設し、祭り全体の取組として認知された。</p> <p>汚れた紙やプラスチックをRPFにしリサイクルするためにオガワエコノスが参画。町内会や企業などが団体レベルでボランティアとして参加するようになった。</p> <p>瀬戸内海の音楽イベント、Set Stock や広島フードフェスタ等のイベントの助言に出向き、減量に貢献。地域の祭りも同様。</p> <p>本取組を参考に福山市がエコイベントマニュアルとグッズを用意し、容器包装類の減量に取組。</p>
その他	本事業は大変話題になり、福山市全体の環境保全意識の向上とNPOと行政、企業の協働のモデル事業として他の事業にも影響を与えている。その大きな要因はアースレンジャーの踊り、歌、寸劇や「笑コ得抽選」など楽しくみんなを巻き込みながらエコをするという取組にある。
推薦の有無	<p>有り</p> <p>【地方環境事務所】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近年80万人を超える参加者がある、ばら祭りにおけるごみの減量に取組み、ボランティア・行政・関係業者と連携し、ごみゼロと100%のリサイクルを達成したものである。また、他の祭りやイベントにも助言を行い、その効果を広げている。

部門：地域の連携・協働部門 **区分：奨励賞**

取組区分	発生抑制(リデュース)、再生利用(リサイクル)
団体名	山形商工会議所青年部「日本一の芋煮会フェスティバル実行委員会」
住所	山形市緑町1丁目9-35
取組の連携実施主体	山形商工会議所青年部、山形商工会議所、山形市
取組名称	「日本一の芋煮会フェスティバル」が発信する「3R推進活動」
概要	<p>・芋煮を食べる際に使用する容器は、ヨコタ東北社(P&Pトレーリサイクル研究会会員)製の「エコ発泡どんぶり」を使用。使用後は徹底した分別回収を呼びかけ、会場内においては約90%の割合で分別回収がなされている。</p> <p>・「ゴミ持ち帰り運動」も併せて展開し、会場の清掃をも喚起している。</p> <p>・リデュース推進の観点から、これまで以上に「マイ箸」「マイどんぶり」持参での来場を呼びかけ、より一層のごみ減量を目指している。</p> <p>・イベント「ふれあい芋煮会」で障害者の方に河川の一斉清掃に協力してもらうとともに、モンテディオ山形(サッカーJ2)の選手との交流会を実施し、一人でも多くの方にリデュース、リサイクルの大切さを呼びかけている。</p>
受賞暦	平成19年度 河川功労者賞
先進性・独自性	<p>・芋煮という山形の伝統料理をテーマにした「食」のイベントで、約19万人の来場者で賑わい、1日で合計3万食以上を提供する、県内でも最大級の規模でありながら、その割に排出されるごみの量が少なく、年々減少している。</p> <p>・本イベントの実施に当たって、関係する団体の規模の大きさ(国、県、市をはじめとする各行政機関、各種企業、一般ボランティア等の幅広い主体が参加)</p>
有効性	<p>・リサイクル製品である「エコ発泡どんぶり」の使用、「マイ箸」「マイどんぶり」の使用の呼びかけ、「ゴミ持ち帰り運動」の展開により、排出されるごみの量が年々減少している。</p> <p>・特に「エコ発泡どんぶり」を使用した15年度からが顕著。</p>
継続性	<p>・日本一の芋煮会フェスティバルは平成元年から実施されており、今年で19回目を迎えた。</p> <p>・イベントの「ふれあい芋煮会」は平成10年より実施されており、今年で10回目を迎えた。</p>
波及性	<p>芋煮を食べる際に使用する容器は、ヨコタ東北社(P&Pトレーリサイクル研究会会員)製の「エコ発泡どんぶり」を使用。「日本一の芋煮会フェスティバル」のイベントに協賛頂いたことが同社製品知名度向上にも寄与している。</p>
その他	<p>”地産地消”にこだわったイベントで、使用する材料について「砂糖」以外は全て地場産品を使用している。</p>
推薦の有無	<p>有り</p> <p>地方環境事務所 「芋煮」という山形の伝統料理をテーマとした県内でも最大級のイベントで3Rの推進活動を行うことは波及効果が大きい。今年で19回目を迎え、今後も継続した3R活動が期待できる。</p> <p>山形市 「日本一の芋煮会フェスティバル」は、本市としても実施主体の一団体として、市長以下全庁をあげて推進・協力しているイベントである。</p>
備考	<p>エコ発泡どんぶり</p>  <p>発泡どんぶりの内側に、薄いフィルムが貼られており、食べた後このフィルムをはがして、リサイクル。ゴミを出さない努力をしています。</p> <p>ゴミの排出量は第15回 2300kg、第16回 1800kg、第17回 2700kg、第18回 2000kg</p>